

アンケート結果をもとにした「絵本の読み聞かせ」試論 —保育・教育現場における読み聞かせの目的を考える—

千 古 利 恵 子 中 條 敦 仁

「絵本の読み聞かせ」には教育的効果があるといわれており、アンケート結果からみると大学生も教育的効果があると受け止めていることがわかる。しかし、読み手が、それぞれに絵本を選び、読み聞かせをおこなっている現状、教育的効果があるかどうかには疑問が残る。そこで、稿者の考える学習サイクルを基本とし、「絵本の読み聞かせ」によりさまざまな能力を獲得するための教育的効果の向上が望めるような試案を提示する。

キーワード：絵本、読み聞かせ、教育的効果、学習サイクルモデル、能力獲得

1. はじめに—大学生の会話から—

本稿の問題提起は、中條と学生との会話を契機に、成されたものである。以下、その会話を簡単に紹介する。

教員志望の学生と雑談をしていた時のことである。その学生が読み聞かせの効果を熱く語りはじめ、ちょっと面白そうだったので、私（中條）は、「絵本の読み聞かせにはまったく教育的効果はないと思うのだけど…」と試してみた。すると予想通りに、「そんなことはない、絶対に効果はある」と反論してきた。「それでは、どういう効果があるの?」と問い返すと、「物の名前を覚える」「ことばを覚える」「想像力が豊かになる」など、一所懸命にその効果を並べ立てた。なんだかますます面白くなってきたので、さらに「ただ絵本を読むだけでそんなに効果があるなら、保育所や幼稚園に先生はいらないね」と試してみた。すると学生は「良い絵本を選び、効果が出るように読み聞かせないといけないから、先生は必要だ」と答えた。

絵本の読み聞かせの教育的効果については、教育学のみならず、言語発達学、文学、芸術学、心理学などそれぞれの立場からさまざまな視点で論じられてきた。

当然、筆者も含め、保育士や幼稚園教諭・小学校教諭の養成に関わる者であれば、教育的効果は皆無である、とは思わない。しかし、学生の言うように、すべての読み手は常に「教育的効果が出るように」と考えて絵本を選び、読んでいるのだろうか。聞き手も「よしっ、絵本を読んで新しいことを学んだぞ」、「世の中には知らないことがいっぱいあるんだな」などと少しでも思いながら、感じながら聞いているのだろうか。無論、このような思いや感想を抱いたかどうかを考えるのは、随分成長してからのことではあるのだが、教育的効果を考える場合、やはり「教えた」結果「学び、知識として定着したことを実感する」という目的がなければならない、という考えにとらわれたのである。

本稿は、大学生433名を対象に実施したアンケートのデータをもとに、「絵本の読み聞かせ」の問題点を探り、教育的効果の向上をはかるため

の試案を探ってみたい。

2. アンケート内容

文系大学(多くは教員養成系)所属の学生(短期大学1・2回生、大学1～4回生)計433名を対象に絵本に関する全11項目(質問数21)のアンケートを実施した(【表1】)。なお、調査実施期間は、2009年4月下旬から6月上旬である。

【表1】

絵本の読み聞かせに関するアンケート

絵本の読み聞かせに関するアンケート)学部()学科()年				
		1.かなり多くある	2.よくある	3.ときどきある	4.ごく稀にある	5.全くない
1	絵本を誰かに読んでもらったことが	1	2	3	4	5
①	親に読んでもらったことが	1	2	3	4	5
②	祖父母に読んでもらったことが	1	2	3	4	5
③	兄弟姉妹に読んでもらったことが	1	2	3	4	5
④	親戚に読んでもらったことが	1	2	3	4	5
⑤	保育所の先生に読んでもらったことが	1	2	3	4	5
⑥	幼稚園の先生に読んでもらったことが	1	2	3	4	5
⑦	小学校の先生に読んでもらったことが	1	2	3	4	5
⑧	中学校の先生に読んでもらったことが	1	2	3	4	5
⑨	高等学校の先生に読んでもらったことが	1	2	3	4	5
⑩	その他()	1	2	3	4	5
2	絵本を一人で読んだことが	1	2	3	4	5
3	絵本を誰かに読んであげたことが	1	2	3	4	5
4	0～3歳の子どもに対する「絵本の読み聞かせ」には教育的効果がある。	1	2	3	4	5
5	4～6歳の子どもに対する「絵本の読み聞かせ」には教育的効果がある。	1	2	3	4	5
6	7～9歳の子どもに対する「絵本の読み聞かせ」には教育的効果がある。	1	2	3	4	5
7	10～12歳の子どもに対する「絵本の読み聞かせ」には教育的効果がある。	1	2	3	4	5
8	絵本は何ページぐらいが適当だと思うか。 [] ページ					
9	記憶に残っている絵本のタイトルを書いてください。(複数回答可)					
10	記憶に残っている絵本から何か学べたことはありますか。(自由記述)					
11	もし、「絵本の読み聞かせ」に教育的効果があるとしたら、どのような効果が期待できると思いますか。(自由記述)					

3. データ結果と分析

【表1】のアンケート項目は、内容を以下の5つに分け、作成した。

内容① (1) … 聞く側の経験。

内容② (2・3) … 読む側の経験。

内容③ (4～7) … 年齢別の教育的効果の有無。

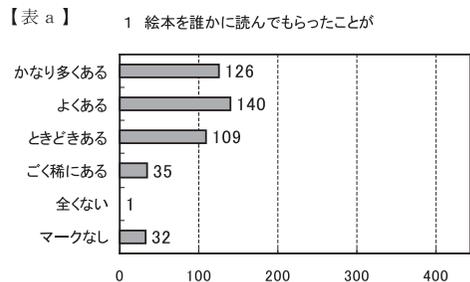
内容④ (9) … 記憶に残っている絵本。

内容⑤ (10・11) … 大学生の考える具体的な教育的効果。

(注) 質問8「絵本は何ページぐらいが適当だと思うか」という質問は、今回の考察から除くが、結果は、「平均16.7ページ」であった。

以下、内容①～⑤のデータ提示・分析をし、考察を加えたい。

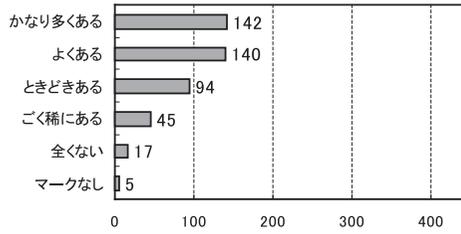
内容①「聞く側の経験」データ・分析



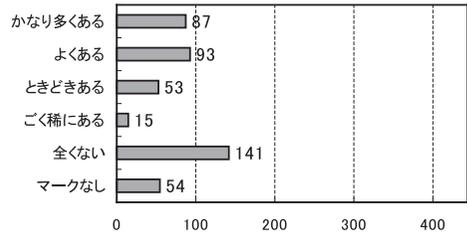
【表 a】は、「読み聞かせをしてもらった経験があるか」という問いに対する結果である。443名中410名が「ある」と答えている。「ある」の内、読み聞かせの回数が多かった、に集約できる「かなり多くある」「よくある」が266名で、全体の60%である。

この数字を多いとみるか、少ないとみるかは難しいところである。それにもまして、「教育的効果」という視点から考えると、絵本を、子どもの何かしらの能力を開発するための「教育書」として位置づけることは、このデータからは難しい。

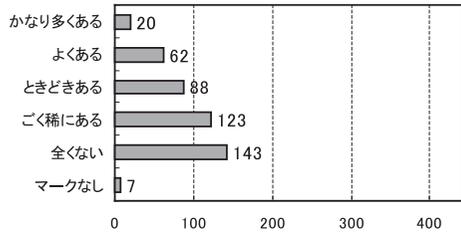
【表 b】 1①. 親に読んでもらったことが



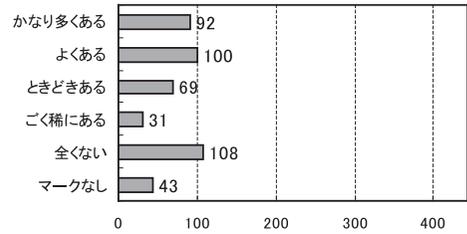
【表 f】 1⑤. 保育所の先生に読んでもらったことが



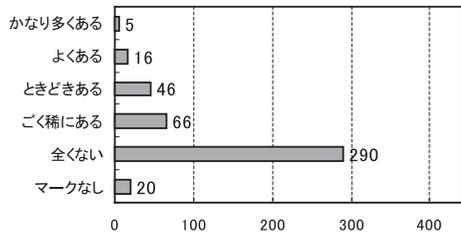
【表 c】 1②. 祖父母に読んでもらったことが



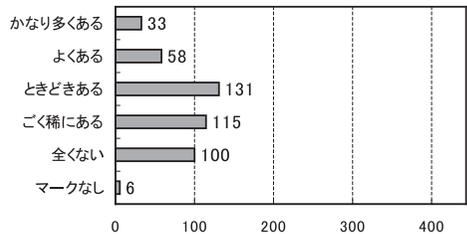
【表 g】 1⑥. 幼稚園の先生に読んでもらったことが



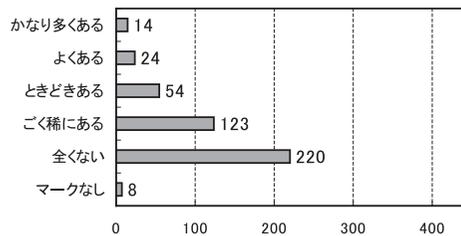
【表 d】 1③. 兄か姉に読んでもらったことが



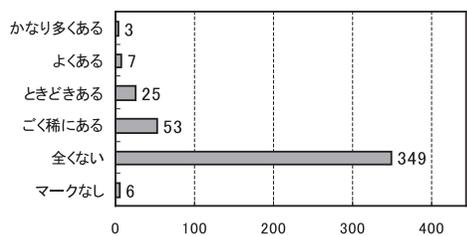
【表 h】 1⑦. 小学校の先生に読んでもらったことが



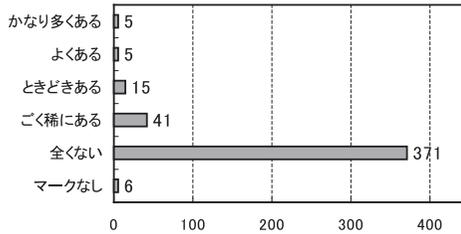
【表 e】 1④. 親戚に読んでもらったことが



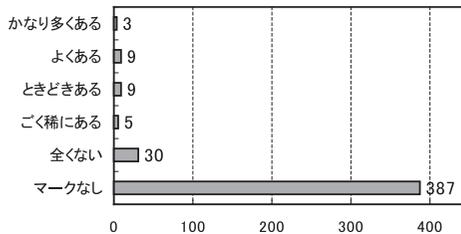
【表 i】 1⑧. 中学校の先生に読んでもらったことが



【表 j】 1⑨. 高等学校の先生に読んでもらったことが



【表 k】 1⑩. その他〔 〕



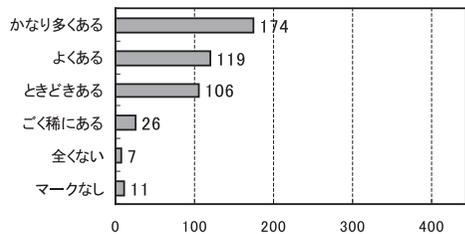
次に、【表 b】～【表 k】は、「誰に読んでもらったか」という問いである。特に「かなり多くある」「よくある」を選択した数を合わせると、読み手としては、親が一番多い（【表 b】443名中282名で、全体の63%）。なお、アンケート用紙には、「親」と記したが、「保護者」と置き換えて回答するよう、説明した）。その後は、幼稚園の先生（【表 g】443名中192名で、全体の43%）、保育所の先生（【表 f】443名中180名で、全体の40%）、小学校の先生（【表 h】443名中91名で、全体の20%）と続く。学生へのヒアリングを試みると、小学校での20%は、幼稚園から小学校への橋渡しを目的として行われていること、導入的な教材として絵本を活用していること、が感じとれた。また、小学校国語教科書には、「おむすびころりん」「ごんぎつね」や「スイミー」など、絵本としても親しみのあるものがあり、導入的なものとして、絵本を使用して

いる可能性が認められる。

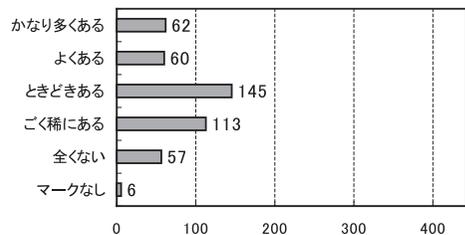
幼児期、もっとも身近にいる存在が保護者（主に親）であることが多いことから、保護者という回答が一番多いのは当然といえよう。しかし、教育的効果を狙って読み聞かせをしているとは言い切れない。どちらかというところ、コミュニケーションを図る手段や共通の話題づくりのために読んでいるのではなかろうか。また、冒頭で紹介したように、教員志望の学生は絵本の読み聞かせには教育的効果があることを主張していたが、教育機関といえる幼稚園、あるいは小学校（主に低学年）、一広義でとらえるなら保育所も含まれよう一において、「読み聞かせ」をしてもらった経験が50%にも達していない。これはどういうことか。ここに、「教育的効果」を考える上での課題がある。

内容② 「読む側の経験」 データ・分析

【表 l】 2. 絵本を一人で読んだことが



【表 m】 3. 絵本を誰かに読んであげたことが

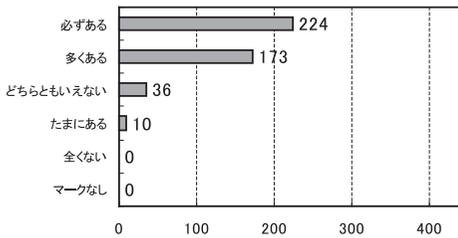


【表 l】は、読み聞かせではなく、「一人で読んだことがあるか」という問いである。「かなりある」「よくある」を選択した人数を合計すると293名で、全体の66%にあたる。これは、読み聞かせの場合の読み手として一番多かった親（266名）よりも、多いのである。また、【表m】は、「誰かに読んであげたことがあるか」という問いである。「かなりある」「よくある」を選択した人数を合計すると122名で、全体の27%にあたる。

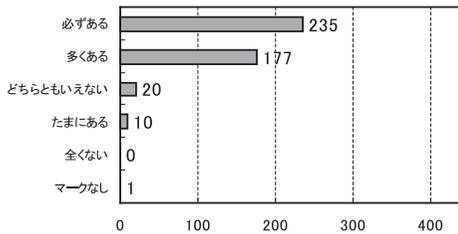
【表 l】【表m】2つの結果からは、絵本は「誰かに読んでもらうもの」というより、「自分で読むもの」といえる。

内容③「年齢別の教育的効果の有無」データ・分析

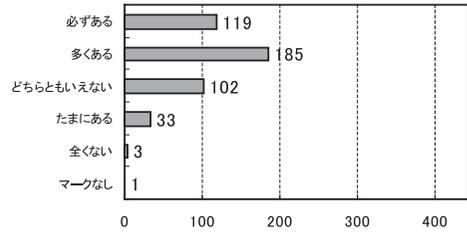
【表 n】 4. 0～3歳の子どもに対する教育的効果が



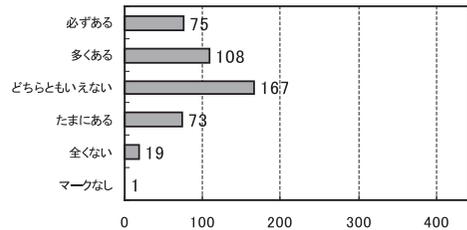
【表 o】 5. 4～6歳の子どもに対する教育的効果が



【表 p】 6. 7～9歳の子どもに対する教育的効果が



【表 q】 7. 10～12歳の子どもに対する教育的効果が



【表 n】【表 o】から、0～6歳の小学校就学前までの子どもに対する「絵本の読み聞かせ」には何らかの教育的効果がある、と多くの人が答えていることがわかる。

内容④「記憶に残っている絵本」データと分析

では、幼児期に「読み聞かせ」をする効果があると回答した大学生たちの記憶にはどのような絵本が残っているのかを明らかにする必要があるだろうと考え、設定したものが内容④である。

質問9では、「記憶に残っている絵本のタイトル」を記してもらった（複数回答可）。その結果、記入総数1204、タイトル総数は369にも上った。次に、集計・整理した結果を、人気が高かった順に掲出してみる。タイトルの掲出は、5票以上獲得したものに限り、それ以下は、タイトル数のみを示すこととする。なお、今回の

集計は、学生の記したタイトルをそのまま入力、整理したものである。従って、記されたタイトルの絵本が実在しているかどうかの確認作業は、現段階ではおこなっていない。

- 145票 「ぐりとぐら」
- 85票 「はらぺこあおむし」
- 48票 「ノンタン」、
- 33票 「ねずみくんのチョコッキ」「スイミー」
- 31票 「100万回生きたねこ（内「100万回死んだねこ」が7）」
- 22票 「ももたろう」
- 21票 「はじめてのおつかい」
- 18票 「11ぴきのねこ」
- 15票 「いないいないばあ」
- 14票 「カラスのパンやさん」
- 13票 「シンデレラ」
- 12票 「わたしのワンピース」
- 11票 「3びきのやぎのがらがらどん」
- 10票 「おしおのぼうけん」「きょうはなんのひ?」「さんびきのこぶた」「じごくのぞうべえ」「ヘンゼルとグレーテル」「もちもちの木」
- 9票 「14ひきのねずみ」「おばけのバーバパパ」「ぐるんぱのようちえん」「アンパンマン」「こんとあき」
- 8票 「かわいそうなぞう」「ごんぎつね」「さっちゃんのまほうのて」「となりのせきのますだくん」「赤ずきん」「日本昔ばなし」「白雪姫」
- 7票 「てぶくろ」「ばばあちゃん」「めっきらもっきらどおんどん」
- 6票 「イソップ物語」「エルマー」「おおきなかぶ」「かぐやひめ」「さるかにがっせん」「ジャックとまめの木」「ずーっとずっとだいすきだよ」

- 5票 「3びきのこぶた」「ウォーリーを探せ」「こまったさんの〇〇シリーズ」「ディズニーシリーズ」「にじいろのさかな」「ピーターラビット」「ぼちぼちいこか」「みにくいあひるの子」「大きなかぶ」「葉っぱのフレディ」
- 4票 〈10タイトル〉
- 3票 〈19タイトル〉
- 2票 〈45タイトル〉
- 1票 〈243タイトル〉

〔記憶に残っている絵本〕の上位5作品は、「ぐりとぐら」「はらぺこあおむし」「ノンタン」「ねずみくんのチョコッキ」「スイミー」である。それぞれ絵本としての初版は、「ぐりとぐら」が1967年、「はらぺこあおむし」が1969年、「ノンタン」が1976年、「ねずみくんのチョコッキ」が1974年、「スイミー」1979年である。ちなみに、「スイミー」は、絵本発行2年前の1977年から光村図書出版発行の小学校2年生用国語教科書に掲載されている。

筆者の一人（中條）は現在三十代半ばで、幼少の頃この5作品は読んだ（読んでもらった）記憶があることから、最も初期の読者であるといえる。これら作品は、絵本の中心として30年以上読み継がれ、現在に至っているということがわかる。この5作品に限らず、31票の「100万回生きたねこ」以下でも、長年読み継がれてきた作品が多くある。従って、読み継がれる絵本には、何かしらの要素があると考えている。このことについては、各絵本の内容分析も含めた検討が必要であり、紙幅の都合上、別稿で述べる予定である。

以上から、1位の「ぐりとぐら」でも、全体の32%（433名中145票）しかなく、さらに、1票のみのものは243タイトルあり、各々が思い

思いに読み聞かせていることが伺えよう。小学校以降の教育に用いる教科書的な存在の絵本はない、ということが確認できる。

内容⑤「大学生の考える具体的な教育的効果」

では、大学生は「絵本の読み聞かせ」に対して、どのような具体的な効果を想定しているのか。以下、特徴的なものを提示し、おおよその傾向を示してみる。

まず、質問10「記憶に残っている絵本から何か学べたことはありますか」という問に対する回答をみてる。

- 1 命の儚さと強さ。
- 2 友だちを大切にすること。
- 3 言葉、文字。
- 4 悪いことをしたら自分に返ってくる。
- 5 良い人は最終的に幸せになる。
- 6 協力すること。
- 7 あいさつをすること。
- 8 片仮名を覚えた。
- 9 生きるってすばらしい。
- 10 想像力と夢。
- 11 失って気づく一番大切なもの。
- 12 さびしさを癒す優しさ。
- 13 こわい、楽しい、面白いなどの感情をもつことができた。
- 14 正義、勇気。
- 15 うそをついてはいけない。
- 16 人に親切にする。
- 17 さまざまな本の内容を自分なりに吸収し、活かす場などで発信できるようになった。
- 18 なにげなく使う言葉の本当の意味。
- 19 絵を真似て描く。
- 20 善悪を判断する力を手に入れた。
- 21 努力はむくわれる。
- 22 字を、読み書きを覚えるのがはやかった。

- 23 世の中の厳しさ。
- 24 みんな同じ（平等）であること
- 25 文章をよまなくても、絵だけで十分本はたのしめるということ。
- 26 自分のことだけを考えていてはいけないということ。
- 27 思いやりの大切さ。
- 28 何らかのことを学んでいると思うが、特に何かはわからない。
- 29 日常生活などに当てはめてみるとおもしろいということ。
- 30 おもしろかったというぐらい。
- 31 想像力が豊かになる。
- 32 素直に自分の気持を言う難しさ大切さ。
- 33 絵本を読む事で、その世界を頭の中に思い浮かべる想像力。
- 34 かんがえること。
- 35 学べたというか、たくさん色や絵、内容から、いろんな考え方を知ることができた。
- 36 今でも絵本が好き。本が好き。文章が好き。
- 37 論理的考え方を学んだ。
- 38 視野が広がった。

以上、掲出した38回答は、記入のあった257の意見の内から、特徴的なものが認められると判断したものを選び、示した。

この38例からも明らかになるが、絵本から学んだことの内容を分析すると、「教訓的」「道徳的」なものが多く、続いて「想像力」「思考力」「言語習得」、さらに「絵を描く力」が養成されると考える傾向にある。

次に、質問11「読み聞かせにどのような効果が期待できるか」という問に対する回答をみてる。

- 1 いろいろな物の名前が覚えられる。
- 2 発音の仕方。

- 3 話しを耳で聞いたことをイメージできる。
- 4 耳から聞いたことを絵と組み合わせて考えていくこと。
- 5 次のページなど先を読む力。
- 6 しつけ。
- 7 自分にできない経験ができる。
- 8 表現が豊かになる。
- 9 語彙習得。
- 10 豊かな感性を育てる（何かに対して感想を持つということ）。
- 11 本を読む習慣づくりの契機となる。
- 12 文章力がつく。
- 13 読み聞かせをすることで、表現力が得られると思う。
- 14 話を視覚的にとらえて、想像力を働かすことができる。
- 15 色彩能力、美的センスが上がる。
- 16 道徳的効果、善悪の判断など。
- 17 情報を自分なりに整理する力がつく。
- 18 一人で読むときの技術。
- 19 話し手によって、その聞いているこの発音に影響する（0～3才）。
- 20 聞く力の育成。
- 21 人の声をきかせることでこどもの脳を刺激し頭の回転がよくなる。
- 22 理解力。
- 23 こどもの感性が豊かになると思う。
- 24 本を好きになる。
- 25 想像力をふくらませることができる。
- 26 将来自分で読もうとするようになりやすい。
- 27 暗記力。
- 28 本をあまり読まない子にも読書の楽しみを教えられると思う。
- 29 集中力。
- 30 思考の発達。

- 31 単純な善悪の判断ができる。
- 32 物事を想像して先の事について予想を立てる事ができるようになる。
- 33 絵をみること、かくことが好きになる。
- 34 聞き取る力。
- 35 豊かな考え方ははぐくむ効果があると思うから幼いころに多く読んであげるとよいと思う。
- 36 絵が上手くなる。
- 37 思考力を深めることができる。

質問11も、前掲の質問10と同様、記入された438の意見の内から、特徴的なものが認められると判断した37回答を示した。大学生は読み聞かせの教育的効果として、「言語力」「想像力」「思考力」「聞く力」「読む力」「判断力」「集中力」「絵を描く力」「暗記力」など、さまざまな効果を提示している。

438の意見全体を見渡すと、「言語習得」「表現力」「想像力」「発想力」に関するものも多く、続いて「道徳観」「思考力」に関するものが多い。「絵を描く力」や「人生の教訓」などの効果を認めるものは少ない。

以上、アンケート結果を概観した。今回、詳細なデータの提示は割愛したが、おおよその傾向は提示できたと考える。そこで、これら結果を総合的にみた時、いくつかの問題点を指摘することができる。

以下、考察していく。

4. 教育現場と大学生データのズレ

内容①【表f】～【表j】の分析で示したように、保育士に読んでもらったことが「かなりある・多くある」を選択したものは全体の

40%、幼稚園教員は43%、小学校教員は20%、中学校・高校教員は2%である。この数値をみる限り、「読み聞かせ」が、保育・教育の活動の中心的なものであるとは、断定しがたい。しかし、大学生の多くが「読み聞かせ」に教育的効果があると考えている。にもかかわらず、保育や教育の現場では、その教育的効果が重視されていないようだ。ここに、矛盾が生じているのである。この矛盾をどう捉えるべきか。それを考えるヒントは、【表b】と【表1】にある。

【表b】～【表k】の分析においてすでに示したが、読み手としてもっとも多いのが「親（保護者）」である。保護者は、保育所・幼稚園の教員よりも、早くから絵本の読み聞かせをおこなうことが多く、絵本からの学びの初期段階は、親（保護者）によるものと考えてよい。さらに、【表1】をみる限り、多くのこどもが絵本を一人で読む時間を多くもっていることがわかり、一人で内容の反復と理解をおこなっている様子が見えてくる。この両結果から、絵本による教育は家庭学習的な傾向が強い、といえそうである。

一方、現在の保育所・幼稚園での学びの基本は「遊びを中心としたしつけと教育」で、グラウンドを走り回る、工作をする、絵を描くなど、こどもの活動を中心とした教育であり、1対1、あるいは1対多の教員の活動を中心とした要素が強い「読み聞かせ」は、二次的なものという位置づけられる傾向が強い、と推測できる。こう考えれば、全体の40%という数字も理解できるのではないか。

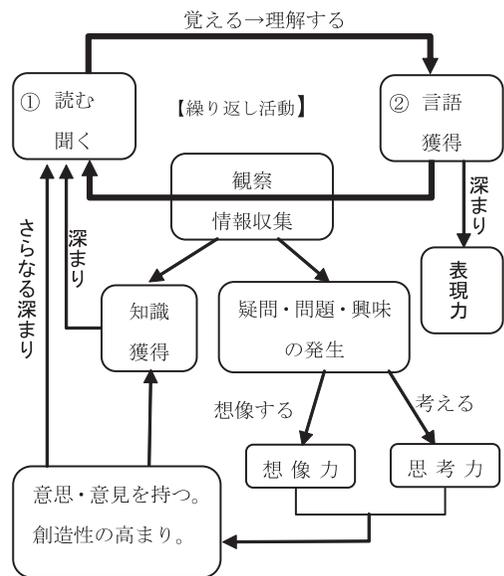
大学生のいう教育的効果を得られるという考えの中心は、教育現場における効果というよりは、むしろ家庭学習を中心に据えた、親（保護者）あるいは自身でおこなった絵本の繰り返し読みの効果、と受けとめるのが妥当であろう。

5. 教育的効果をあげるための考え方

保育所・幼稚園課程を終えたこどもたちは、小学校課程に進み、さらに中学課程へと進む。小学校入学以降、高等学校の教育に至るまで、どの教科の学習においても、「観察・情報収集力」「分析力」「想像力」「思考力」「創造力」「言語運用力（「読む」「聞く」「書く」「話す」の4観点に加え、「語彙力」）」が求められる。

「言語運用力」については、国語の指導要領に「読むこと」「聞くこと」「書くこと」「話すこと」の4観点の修得が求められている。子どもは、小学課程入学後、いきなりこれらの能力を身につけるわけではない。その基礎となるものは、小学校入学前、つまり幼児教育の段階で育てておく必要がある。

【表2】「学習サイクル」モデル



【表2】は、筆者の考える基礎・基本を中心に据えた学習サイクルモデルである。

【表2】に関して、少し述べておくと、学習者の活動の基本には「①読む・聞く」と「②言語獲得」のサイクルの繰り返しがあると考えられる。第一段階は、書くため、話すための語彙獲得から始まる。これは繰り返し「読む・聞く」ことにより語彙力が増えていく。第二段階として、「読む・聞く」ものを対象として観察・情報収集が始まる。これは言語に限らない。その行動を繰り返すうちに、第三段階として知識の獲得と定着が図られると同時に、疑問・問題・興味が発生し、想像したり、考えたりし、創造力・思考力が構築される。第四段階として、意思・意見や創造力を持つようになっていく。

このように、「①読む・聞く」と「②言語獲得」という基本サイクルを繰り返すことを中心とし、第二段階以降が複合的に付随することによって、さまざまな能力が高まっていくと考えるのである。

以上から、教育的効果をあげるためには、基礎基本を重視した学習サイクルをもとにした、繰り返し学習をベースとし、応用力と創造性を積み上げていくことが必要と考える。

6. 教育現場における読み聞かせの目的

では、本題に戻るが、学習サイクルモデルをもとに、「絵本の読み聞かせ」の活用法の一案を示してみる。

よりよい活用を考える上で忘れてならないのは、本稿「3. データ結果と分析」の中で、「教育現場と大学生データのズレ」を指摘したように、絵本の読み聞かせの中心となる「読み手は保護者(親)である」ということである。そこで、保護者による読み聞かせの効果を勘案した上で、保育所・幼稚園などの教育現場での活用法を考えたい。

まず確認しておかなければならないことは、家庭でも保育所・幼稚園でも基本サイクルである、「①読む・聞く」→「②言語獲得」の第一段階、「観察・情報収集」を含めた第二段階の基本サイクルを軸に、繰り返し読みをおこなうことは必要となる。そこで考えなければならないことは、第三段階である「知識獲得」と「疑問・問題・興味の発生」以降である。

家庭での保護者の読み聞かせは、基本サイクルの繰り返しを基本に、物の名前やことばを覚えるというような「知識獲得」を中心に行っていることが多い。この活動は、【表2】学習サイクルモデルのうちの「知識獲得」(第三段階活動)の一部にあたる。

家庭で実施される「読み聞かせ」の中心が「知識獲得」であるならば、保育所・幼稚園の幼児教育現場では、第三段階のもう一方の「疑問・問題・興味の発生」に主眼をおいた読み聞かせを目的とすることが有効と考える。

なお、具体的提案は稿を改め示したい。

7. まとめ—今後の展望—

以上、絵本の読み聞かせの教育的効果を高めるためには、「①読む・聞く」→「②言語獲得」の第一段階を繰り返しつつ、徐々に「観察・情報収集」を含めた繰り返し読みをベースに考えなければならないことは、提示できたと考える。さまざまな能力を身につけさせるには、絵本の「読み聞かせ」は、「効果がある」とする漠然とした考えの基に行ってはならない。絵本の「読み聞かせ」は知識獲得のためのものなのか、疑問や問題意識を持たせるためのものなのか、あるいは興味を持たせるためのものなのか、その意図を読み手が考え、そして聞き手がそれを意識できるようなものでなければならない。

とはいえ、保育ならびに教育現場を取り巻く環境は、さまざまである。家庭やこどもの状況に合わせて臨機応変に対応することも、一方で必要である。ただ、幼児期につけておくべき能力は、「絵本の読み聞かせ」に限らず、あらゆる方法を用いて、獲得させておくべきである。保育・教育に関わる者だけでなく、我々大人は、いかなることにも、基礎や基本が肝心であると認知しながら、効率の良さを求めすぎるあまり、基礎・基本を疎かにした教育に、近年傾斜しているように思うのである。人として、さらに社会の一員として生きていくためには、基礎・基本を身につける幼児期の過ごし方や教育のあり方が、大きく影響するに違いない。個人主義・効率主義を追求する現代であるからこそ、保護者や保育者・教育者だけでなく、この社会を形成する大人一人一人が、子どもに目を向け、向き合い、幼児教育のあり方を検討する時期が来

ていることを、確認すべきではないのか。

今後は、今回得た膨大なデータをもとに、千古、中條それぞれの視点で、「絵本の読み聞かせ」をキーワードに、幼児教育の課題発見や具体的改善方策等を提示したいと考えている。

参考文献

- ・中川素子 1991 『絵本はアートひらかれた絵本論をめぐして』 教育出版センター
- ・瀬田貞二 1985 『絵本論(瀬田貞二子どもの本評論集)』 福音館書店
- ・棚橋美代子・阿部紀子・林美千代 2005 『絵本論この豊かな世界』 創元社
- ・松本猛 1982 『絵本論』 岩崎書店
- ・武田京子 2006 『絵本論』 ななみ書房
- ・松居直 1981 『わたしの絵本論0歳からの絵本』 国土社
- ・野村昇司 2004 『子育てに絵本の読み聞かせを』 銀河社